

小學校教科用書

尋常小學讀本

明治三十年五月文部省編輯局



上にておづかに目をとぢふさぎ、
眠れぬむれ、人形よぬむれ。

起きよおきよ、人形も起きよ。

朝ねをするか、とく起き出でよ。

今こそまゝ、たく時とはなりぬれ。

まゝ、たく手つたひすることそよけれ。

おきよ起きよ、人形もおきよ。

あゆめあゆめ、人形もあゆめ。

朝日のひかりよさきだち出で、

いざあれもろとも小やまふ上れ。

いざあれもろとも小やまを下れ。

あゆめあゆめ、人形もあゆめ。

第二十六課

むかし、ちびとばびとが有りまゐた。
ちびは、山へくさかりに、ばび

は、川へせんたくに行きまゐた。
川上から、大きな桃が一つ、
かがれて來まゐた。それを取りて
見ますと、大さううまさうか。桃
でありまゐた故、おゝとふたり
で、たべやうとて、家に持ち
かへりまゐた。
おゝが、山からかへりますと、ばゝ

は、直に桃を出ゐまゐた。そして
ふたりがたべやう
と思つて居ると、
桃は、二つに
われて、中から、
かはゆらしいをとこ
の子がうまれ
まゐた。



二人は喜んで、其子を取りあげ、
ゆをつかはせますと、其子は、
たらひをたかくさゝあげて、投げ
出した力に、二人はおどろき
ました。

此子は、桃の中からうまれた
故に、桃太郎と名を付けました。

山川桃一家喜

第二十七課

桃太郎は、だんく大きくなりて、

まことにつよくおりました。ある

日、おゝばゝ子向うて、私は、

鬼がしまへ、たから物を取りふ

行きたい」といひました。

二人は喜んで、朝早く起き、べん
たうに、きびだんごをこゝらへて

やりまゐた。

桃太郎は、其

だんをこゝに

つけて、家を出

立、山をこゝ

てゆきまゐた。

少ゝ行くと、川

のむかふから、犬が來て、「あなた



はどこへお出なされますか。又
おこゝに付けたのは、何て
ござります。

「あれは、鬼がゝまゝ行くので、
こゝに付けた物は、日本一の
きびだんだだ。」

「一つ下され、お供いたしませう。」

桃太郎は、だんをやり、犬を

供につれまゐつた。次に猿が
まゐり、其次に雉が來て、犬
とおなじやうに、供をぬがひ、
だんごをもらひまゐつた。

鬼 供 次 猿 雉

第二十八課

桃太郎は、犬猿雉を供につれ、
鬼がゝまへゐたりて見ると、鬼

は、門を閉ぢて入れませぬ。それ
故、雉は一むんさきに、門の
やねをとびこえ、次子猿は、
へいをのりこえて、内から門
を開きまゐつた。

そこで桃太郎は、犬と一よ
に、門の内におり入り、多く
の鬼とたゝかひ、つひにおく

までせめこみまゐた。其時、大
いやうのあかん
どうじは、太い
てつのはうを
持ちて、桃太郎
を打ちてかゝる
と、桃太郎は、
受けながれて、



くみうちをはじめ、つひにあかん
どうじをいばりあげてしまひまゐた。
鬼どもは、おそれて、かうさんを
ねがひ、かくれみの、かくれがさ、打
出の小づち、さんとしゆなどの、
たから物を出しまゐた。桃太郎
は、それを車につませ、これは
たれの手車、桃太郎どのの手

車』とはやさせながら、ちのば
への、みやげ車に、持ちあてかへり、犬
猿、雉にも、分けて、やりまゐた。湖
門、小閉、開、車の分る、
ある朝、二郎が起きて見ると、
大さうな雪で、有りまゐた。此
雪は、さう夜より、降りつゝいた

第二十九課

故、みちも分らば、車もとほらぬ
ほどに、つもりまゐた。手、
まかり、二郎は
いさみたて、
早く、かくかう
へ行かうとて、
力三を、さそひ、
まゐた。

